

# 自分の思いを伝えることのできる小学校英語の研究 —やり取りを中心とした指導法を探る—

言語文化系教育サブプログラム 英語 21AF151

荒木 康佑

【指導教員】 及川 賢 武田 ちあき 田子内 健介

【キーワード】 小学校英語 話すこと（やり取り） Small Talk 定型文（型）

## 1. はじめに

小学校では2020年度から学習指導要領の改訂により3、4年生が外国語活動、5、6年生は外国語を行っている。今回の学習指導要領の改訂による大きな変化の一つは、5、6年生が活動から教科となり、4技能5領域（「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」）を総合的に学び、検定教科書を使って学習するようになったことだ。

その中で、「話すこと（やり取り）」を学ぶ単元では、そこで扱った表現だけのやり取り（一問一答のような型にはまった会話や暗記しただけの会話）に終始している児童の存在に疑問を持つようになった。日常で考えた時、このような会話は不自然であり、相手や状況によって話す内容は変わるのが一般的だからである。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編によると「話すこと（やり取り）」で求めているのは「その場で、自分の力で伝え合うこと」であり、それが中学校の「即興」で話すことへとつながっていくと記されている。また高学年では Small Talk という活動が設定されており、ここでの活動は予め準備したスクリプトを使っての会話は想定されていない。つまり「自分の言葉で話すこと」が推奨されているのである。

そこで本研究は、Small Talk に焦点を絞って研究をしていく。Small Talk の中で児童同士が英語で自然なやり取りができるようになれば、普通のやり取りの時にも、型にはまっただけの会話にならず、自分の思いの入った自然な会話ができるようになるはずだと考えたからである。

## 2. 先行研究

まず、「話すこと（やり取り）」について小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編によると、外国語活動の目標イには「自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする」とある。また、外国語の目標イには「日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことのできるようにする」とある。どちらにも「自分の考えや気持ち」という表現が入っており、一問一答のような会話を求めていることが分かる。また、外国語の目標ウには「自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や

基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする」とある。「その場で」という表現から、事前に話す内容の準備をせずにある程度即興で話すことが求められている。このことから、学んだ表現や言語材料を暗記して、そのまま機械的なやり取りをすることは求められていないのである。

次に、英英辞典では small talk を“Polite friendly conversation about unimportant subjects.”（LONGMAN, 4th Edition Dictionary of Contemporary English）と定義しており「あまり重要ではないことに関する会話」の意味で使われている。しかし「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」によると、Small Talk とは「高学年で設定されている活動で、あるテーマのもと指導者の話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合う活動」とされている。目的は「既習表現の定着」と「対話の続け方を学ぶこと」であり、両者は全くの別ものだと分かる。また「誰かになりきって話したり、役を演じて擬似的な対話をしたりするのはなく、自分自身に関する本当の事や気持ちについてやり取りをすること」とも書かれている。以上のことから、Small Talk と「話すこと（やり取り）」は類似しており、どちらも自分の思いや気持ちについて話すことを大切にしていることが分かる。

先行研究としては山口・巽（2020）による Small Talk における発話の研究がある。対象は小学校1年生から6年生までとその6年生を追跡調査した中学1年生で、1年間 Small Talk を毎時間の授業で帯活動として取り入れていき、どのように発話に変化するかを見たものだ。この研究から示されている結果の一部が「発話する総語数がどの学年も増加する」ということと「使用表現や話す内容を指定しない発話パフォーマンスにおいて、小学校1年生から6年生までの児童が既習表現を即興的に発話に用いることができる」ということだ。つまり Small Talk を通して児童の発話パフォーマンスは大いに向上させることができるのである。しかし「型にはまった会話かどうか」という点においては言及されておらず、さらに調査が必要である。

山田（2018）は著書の中で、「話すこと（やり取り）」における「暗記・発表の要素が強い授業」の例を挙げ、その課題を挙げている。それは①児童Aと児童Bとのやり取りが、順番（最初にAが～と言い、次にBが～と言う）も含めてあらかじめ決められている。②児童はそのやり取りを順番も含めて頭に入れ、言語活動において、それを再現している。③教師は子どもがそのやり取りを順番も含めて覚える

ことができるよう活動や指導を工夫している、の3点である。この状況で児童に求められているのは「思考力や判断力よりも暗記力なのではないか」「その瞬間はやり取りができるかもしれないが、その後の定着はあまり望めない」と述べており、「暗記・発表の要素が強い授業」から「思考・判断しながら表現する授業」への転換が必要だと述べている。

株式会社イーオンがセミナーに参加した小学校の先生方を対象としたアンケートの株式会社イーオン(2021)によると、4技能5領域の中で教えるのが難しいと感じているのは「話すこと(やり取り)」で、「やり取りが教科書の暗記になってしまう」「定型文のやり取りになりがちで会話が広がらない」ということが原因として取り上げられていた。これらの対応策として町田(2021)は「教科書の内容を児童に関連づけて面白くアレンジしよう」「子どもたちの会話を型にはめないこと。一単語だけでも、正確さに欠ける表現でも構わないので、児童が自分の思いを伝えられる会話にしていることが大切」と述べている。

以上のことから、暗記や型にはまったやり取りではなく、自分の思いの入った自然なやり取りができるような児童を育てることが重要だと分かる。そして、そのためにはどのような指導をすればいいのか、様々な研究が進められている。

そこで本研究では、まず予備調査で3~6年生の児童が英語で自由な会話をどの程度できるか実態を調べ、その結果をもとに本調査では対象を4年生に絞り、クラスごとに異なる指導を行い、児童の発話の変化を調べることとした。

### 3. 予備調査

#### 3-1 目的

本調査は、児童がどの程度英語で自らの思いを自由に話すことができるのかを Small Talk の活動から調査し、明らかにすることを目的とした。対象を3年生から6年生までと広く設けることにより、現時点でどれくらい型にはまらない自然なやり取りができるのか、学年ごとに実態を掴んでいきたい。また同じペア・同じテーマで2回会話をさせることによって、発話量の変化についても確認したい。

#### 3-2 方法

ペアで Small Talk を2回行い(同じ相手)、2回ともタブレットに録画し、文字起こしをして分析した。方法については、山口(2019)の実践を参考にした。具体的には

- |  |    |
|--|----|
| ①ALTと著者の会話                                 | 3分 |
| ②ALT(または筆者)と児童全体の会話                        | 3分 |
| ③児童同士の会話1回目                                | 1分 |
| ④ディスカッション(言いたかったけれど言えなかったことや困ったことなどの確認と共有) | 4分 |
| ⑤児童同士の会話2回目(1回目と同じ児童)                      | 1分 |

である。山口の実践では、2回目の会話を行う時にはペアを交代していたが、発話量の変化も見たいために、あえて2回目も同じペアで会話をさせた。テーマは、全学年共通で「好きな季節について」とした。実施日は2021年7月の4日間で、埼玉県公立A小学校の3~6年生から1クラスずつ抽出

して行った。児童数は3年生36名、4年生31名、5年生33名、6年生33名。なお、本調査を実施したA小学校は、文科省から教育課程特例校に指定されており、全学年で小学校英語の研究をしている(全学年で毎日9分間の授業と週1時間の45分間の授業)。よって今回のテーマである「好きな季節」は1年生で学習済である。また理由や具体例を入れて話を広げやすい話題でもあると考えられる。Small Talk については、すでに授業で扱っているが、今回のような流れで行うのは初めてである。

#### 3-3 結果

各学年の特徴を以下にまとめた。

##### 【第3学年の会話の印象】

- ・「何のキャラクターが好きか」や「好きな虫の話」などテーマと違う話を始めていた。
- ・どのペアも何かしら会話をしており、全体的にガヤガヤしていて沈黙は少なかったが、日本語も多かった。
- ・好きな季節の話をした後に好きな色について聞くなど、会話の流れを無視して、とにかく知っている英語を使って聞いたり答えたりしていた。
- ・What ○○ do you like?の表現は知っているのだが、season, spring, autumn, winter, summerなどが定着しておらず「何て聞くんだっけ?」「○○って何て言うの?」などが多かった。
- ・児童同士の会話が成り立っているのか(お互いに言っていることを理解しているのか)不明だが、児童の行動や表情からすると、とても楽しそうにしていた。
- ・「What season do you like?という表現から会話を始めなくてはいけない」という認識が児童たちから感じられた。
- ・1回目と2回目の会話をターン数(会話の往復)で比較すると微増の傾向があった。

##### 【第4学年の会話の印象】

- ・What ○○ do you like?の表現は知っているのだが、season, spring, autumn, winter, summerなどが定着しておらず「何て聞くんだっけ?」「○○って何て言うの?」などが多かった。しかし3年生よりは言えている児童は多い。
- ・答えるときにI like winter.の後に Do you like winter?という表現を付け加えられる児童がおり、3年生に比べて一つのテーマに沿った会話の促進が見られた。
- ・3年生と比べて、日本語の使用は少ないが、何と言えいいのか困っていたり(言いたいことがあるが英語での言い方が分からない)、お互いに好きな季節について聞いた後は何の話をすればいいのか分からない様子が見られた。
- ・沈黙が多く、1分間会話を継続することが困難なペアが多かった。お互いに好きな季節について聞いて満足している様子だった。
- ・1回目と2回目の会話をターン数で比較すると微増の傾向があった。

##### 【第5学年の会話の印象】

- ・3年生とは逆で好き勝手に話すことはせず、はじめに教師によって示された会話やディスカッションで示したものと同じパターンの会話をしているペアが多かった。

- ・日本語は少ないが、沈黙や空白の時間が多かった。児童のつぶやきとして「すぐ終わっちゃうよ」「聞くことがなくなった」と言っているペアが多かった。
- ・ほとんどの児童が What season do you like?や spring, autumn, winter, summer の語句を使って会話をしているが、それだけで終わっていた。
- ・一部の児童だが、3・4年生に比べて、一つのテーマに沿って会話を広げていた。特に why?や because を使ったやり取りをしているペアが多かった。
- ・キョロキョロして周りの様子を伺っており、緊張している様子が見られた。
- ・きちんと相手の言っていることを聞き取ろうとしたり、確認したりする姿が見られた。耳を近づけたり、人差し指を立てて「もう一回言って」というジェスチャーをする姿があり、相手の言っていることをきちんと理解して会話を進めていこうとする姿があった。

### 【第6学年の会話の印象】

- ・相槌やジェスチャーをうまく取り入れていた。
- ・会話のターン数（会話の往復）が多かった。
- ・What season do you like?や spring, autumn, winter, summer などの表現を使いこなせているペアが多かった。
- ・日本語を適宜織り交ぜながらではあるが、一つのテーマに沿って内容を広げて1分間会話を続けられているペアが多かった。また、楽しそうに会話をしていた。

### 3-4 考察・まとめ

#### ①会話の質の向上

学年が上がるにつれて「テーマに沿った会話をする」という力がついていた。3年生は、会話の内容を無視して自分の知っている英語を使ってとにかく相手に何か伝えられれば嬉しい、という印象だった。逆に5、6年生は、相手が言っていることをしっかりと把握し、日本語で会話する時と同じような感覚で会話をしようとしていた。

#### ②英語で会話をしてみようという態度

どの学年も「児童だけで自由に会話をする」という経験はほぼ初めてだったが、「何とか英語だけで会話を続けよう」という態度が見られた。これは普段からA小学校の先生方が英語教育と真摯に向き合い、児童にとって英語が身近で、自信を持って学んでいるからだと考えられる。

#### ③やり方の理解不足（特に3、4年）と不自然さ

「同じ人と同じテーマで2回会話を行う」ことから「同じ内容の会話をもう一回しているのか」といった疑問を抱いていることが児童のつぶやきから分かった。もちろん事前に説明をしていたのだが、調査のためとはいえ、同じテーマで同じ人と繰り返し会話することへの違和感は相当あったと思われる。特に5、6年生では、2回目は1回目よりも早く会話が終わり、最後に沈黙が増えてしまった。

#### ④聞いて終わりという概念

「英語で自由にどれだけ会話ができるか」という実態を見たかったので「1分間会話を続ける」という指示をしていたのだが、特に4、5年生では、以下に示すような型で会

話を終わると、後は何をすればいいのか戸惑っている姿が多く見られた。

A:What season do you like?

B:I like summer. What season do you like?

A:I like autumn.

B:.....

#### ⑤発話方法を強制する手助け

ペアの相手が困っていたら助けてあげる姿もたくさん見られたのだが、強制するパターン「次は私に聞いて！〇〇って聞くんだよ」や 助け船を出すパターン「(小声で相手に) What season do you like?って言うんだよ」が多く見られた。このことから「季節について自由に話している」と言う条件にも関わらず、英語で話す時には決まった型（定型文）のようなものがあり、「Aと聞いたら（言ったら）次はBと聞かなければいけない（言わなければいけない）」という概念が一定数存在するのではないかと考えられる。

#### ⑥適切なテーマの選定

今回は会話のテーマを「好きな季節」としたのだが、特に3、4年生にとっては season, summer, winter, autumn, spring の語句が定着しておらず、会話が進まない傾向が見られた。

予備調査から④、⑤で見られるように「〇〇という表現を使って会話をしなければいけない」「お互いに聞いたら終わり」という認識があることが分かった。英語で自分の思いをのせて自由に会話をするためにはこれを突破し、どのように発話量を増やせるかがポイントとなる。そこで本調査では、「型にはまらず、テーマに即した上で自由な会話を促すには、どのような指導法が適しているのか」を調査することとした。

## 4. 研究

### 4-1 目的

予備調査から、学年が上がるにつれて会話の質が向上する一方で、型から脱しない会話を強制したり、その型通りの会話ができたら満足してしまっている状態の児童も存在することが分かった。それらの児童に対応する指導法としては、良い会話のモデル（型にはまらない自由な会話）を試聴させ、どこがいいか指導し児童の会話の改善を促す方法と悪いモデル（型通りの会話）を視聴させどこが悪かったのか指導し児童の会話の改善を促す方法が考えられる。しかし今回は公立小学校で調査を行うにあたり、教育の公平性を保つために、どちらか一方の動画を視聴させて指導をするのではなく、全クラスで両方の動画を視聴させた。また、対象を会話の質が向上している最中と考えられる4年生3クラスに絞り、動画を視聴させた後、それぞれに異なる指導を行うこととペアを変えて繰り返し同じテーマで会話をさせることによる発話量の変化を明らかにすることを目的とした。そして、どうしたら型にはまらない自由なやり取りができる（やろうとする）児童を育てられるのか見極めたい。

#### 4-2 時期と対象について

2021年11月から12月の3日間で埼玉県公立A小学校4年生（7月に実施したクラス以外の3クラス）A組（32名）、B組（32名）、C組（32名）で実施。

##### 【対象を4年生児童に絞った理由について】

- ・予備調査で、特に型に沿った会話をしている傾向が見られたため。
- ・小学校中学年による会話分析の先駆けとしてどれだけ話せるのかデータ収集をしたいため。
- ・著者がSmall Talkの授業を行うにあたり、以前担任をした学年であり、児童の実態が把握できていること。また児童も筆者を知っているので緊張することなく普段通りの会話が可能になると考えられたため。
- ・1年生から英語を学習しているA小学校の4年生は、一般的な公立小学校の高学年の英語能力と近いと考えられ、実践に生かしやすいのではないかと考えられるため。

#### 4-3 手順

予備調査と同様に児童のタブレットをペアで一つ使用し、会話を全て録画した。後日、全て文字起こし、それを使って会話分析を行った。指導の流れは以下の通りである。

	4-A	4-B	4-C
①	挨拶		
②	やり方とテーマの提示		
③	今後の流れの練習とやり方についての質疑応答		
④	1回目のSmall Talk		
⑤	会話モデル動画の視聴 (△→◎)	会話モデル動画の視聴 (◎→△)	会話モデル動画の視聴 (△→◎)
⑥	よかった点に絞った指導	よくなかった点に絞った指導	ペアでの話し合い
⑦	ペアを交代して、2回目のSmall Talk		
⑧	ペアを交代して、3回目のSmall Talk		

◎：1分間テーマに沿って会話をしている動画

△：1分間会話が続き、一問一答のような型通りの会話しかしていない動画（会話の後半は沈黙）

##### 【詳細な内容】

- ① “Good morning, everyone!” “How are you today?” など通常A小学校で行っている挨拶を筆者と児童全体で行った。
- ② 掲示物を作成して今回の調査方法について説明した。
  - ・2人組で自由に英語で会話をする
  - ・テーマは「好きな食べ物」
  - ・1分間英語で会話を続ける
  - ・ペアを交代して3回行う
  - ・会話の内容は3回とも変えても同じでもよい
  - ・タブレットはペアで1つ利用し、1回目のSmall Talkから録画を開始して3回目が終わるまで録画を続ける

※テーマは、既習の「好きな食べ物」とし、語句や表現における発話の負担を予備調査より減らした。

- ③ 予備調査では本授業の流れを理解できていない児童が一定数いたのでこの時間を設けて再度確認した。
- ④ ペアで1分間1回目のSmall Talkを行わせた。予備調査では筆者とALTによる会話を見せて、話す内容について理解させたが「その示された会話と同じような流れで会話をしなければいけない」という様子が5年生から見られたので、テーマだけを示して会話をさせることとした。
- ⑤ 動画は、筆者とALTで事前に撮影し、1分間好きな食べ物について会話が継続している◎の動画と、お互いに好きな食べ物について質問して答えるだけで会話が終了し、残りは沈黙が続く1分間会話が継続しない△の動画を作成した。視聴した動画が児童の新たな型となってしまわないように、また教育の公平性を保つために全てのクラスに両方の動画を視聴させた。視聴の順番は、その後の指導に合わせて印象に残ってほしい方を後にした。C組の視聴順については、ペアで話し合いをさせる際に印象に残っていて欲しい◎の動画を後に視聴させた。

##### 【◎動画のスク립ト】

A:Hi.

B:Hi.

A:What food do you like?

B:Um... I like ramen.

A:Oh, you like ramen!

B:Yes. I love ramen. Negi-cha-syu-men.

A: Negi-cha-syu-men?

B:Yes!!

A:Oh, That's nice.

B:How about you? What food do you like?

A:I like curry and rice!

B:Oh, you like curry and rice!

A:Yes! Do you like curry and rice?

B:Yes! me too.

B:.... Do you like... very hot? ..or no hot? (ジェスチャーをしながら、何とかして相手に辛いのが好きかどうかを聞いている状態)

A:Umm.. I like chu-kara.

B:Oh I see!! I like geki-kara.

A:Really? It's very very hot!!

B:Yes!! But it's very yummy!!

##### 【△動画のスク립ト】

A:Hi.

B:Hi.

A:What food do you like?

B:Ramen.

A:...

B:What food do you like?

A:Curry and rice.

B:...

※上記会話を約30秒で行い、残り30秒はずっと沈黙。

⑥2つの動画を視聴後、クラス全体に指導をした。4-Aと4-Bは筆者からポイントを提示した。4-Cにおいては、4-Aと4-Bで指導に要した時間の分だけペアで動画についての話し合いをさせた。以下に詳細を示す。

4-A: ◎の動画の場面を想起させながら、1分間会話が続いた理由として考えられるよかった点について3つに絞りアドバイスを行った。

- (1) 「Do you like...hot?+ジェスチャー」のようにジェスチャーをうまく使いながら、自分の言いたいことを何とかして相手に伝えていた。
- (2) 相手が言ったことに対して「That's nice!」などを言って反応していた。
- (3) 「I like curry and rice! (相手) Oh, you like curry and rice! (自分)」のように相手の言ったことを繰り返して内容の確認をしていた。

4-B: △の動画の場面を想起させながら、1分間会話が続かなかった理由として考えられる良くなかった点を3つに絞りアドバイスを行った。

- (1) ただ立ったまま何もしないで話していた。
- (2) 相手が答えた後もずっと黙ったままだった。
- (3) お互いに好きな食べ物について聞いただけで会話が終わってしまった。

4-C: 2つの動画を視聴後、「2つの動画は同じテーマで話合っていたけれど随分違いましたよね。それでは今のペアの人と2回目の会話に向けて、さっき見た動画についてどう思ったか日本語で話し合ってみましょう。」という声かけのみを行い、話し合わせた。

⑦相手を交代して1分間、2回目のSmall Talkを行う。

⑧相手を交代して1分間、3回目のSmall Talkを行う。

#### 4-4 分析項目

以下に分析項目の概要を述べるが、詳しい内容については4-5の結果でまとめる。

##### 【正確さに関する分析】

ASユニットを単位として分析を行った。ASユニットとは筑波大学(2009)の用語集によると、発話を分析するために作られたユニットであり、The Analysis of Speech Unitの略である。HuntのT-unitを基にして統語的な単位を基準としている。AS-unitは単一の発話者が発した独立した節、または独立した副節であり、これらに従属節を伴うこともある。その他の詳細は以下に示す。

- ・初めの挨拶はペアによっては、行っていない場合もあるのでカウントしない。
- ・pruned token (繰り返しや言い直しを除いたもの)でカウント。
- ・ASユニット (All)  
→日本語と英語全てを含めたユニットをカウント。
- ・エラーを含むASユニット (Jap▲)  
→日本語だけと日本語を含んだユニットをエラーとしてカウント。またフィラーはカウントしないが「Oh!」などのリアクションはカウントした。4年生という実態から、日本語か英語かの判断を次のようにした。

①発音の正確さを強く求める指導はしていないので、カタカナ発音でも英語と判断した(例: I like ピザ。をピッツァというところまで発音指導を図っていない)。

②日本語だがカタカナで表記できるものは基本的に英語と判断した(例: I like マック、オムライス、カレーなど)。

③日本語でしか表せない(表しづらいもの)名詞や固有名詞は英語と判断した(例: I like 白子。→白子を英語で言うには難しすぎるし、たとえ英語で言ったとしても相手には伝わらないため)。

④A 小学校の英語学習4年間において既習であり、十分定着していると判断される語句を日本語で話した場合は日本語とした(例: I like りんご→日本語としてカウント)。原則は上記の通りだが、最終的には文脈によって日本語か英語かを判断した。(例: 相手が言ったことに対して日本語でそのまま聞き返した場合は日本語とした(I like 白子←英語と判断/白子って?←日本語と判断)。

・エラーを含むASユニット (Eng▲)

→英語においてエラーを含んだユニットをカウント。4年生という実態から、エラーを以下の条件で判断した。

①主に語順や文法使用における明らかな間違いのみをエラーと判断した(冠詞・前置詞・時制などは含まない)。

②自分の言いたいことを何とかして伝えようとしており、それが未習表現である場合はエラーとしない。

③以下に示すような形でポイント化して加算していった。

0: 文法○ 相手に○ (文法的に正しい活用、相手に伝わっている)

▲1: 文法× 相手に○ (文法的に間違いあり、相手に伝わっている)

▲2: 文法× 相手に× (文法的に間違いあり、相手に伝わっていない)

##### 【発話量に関する分析】

正確さの分析と同様にして、ASユニットを元にして行った。ASユニット (All) -【エラーを含むASユニット (Jap▲) +エラーを含むASユニット (Eng▲)】で算出し、英語で正確に話せたものを発話量として分析した。

##### 【沈黙に関する分析】

以下に示す2種類の沈黙の時間を計り分析した。

・沈黙(会話中) : 秒

→会話中3秒以上沈黙した場合の時間をカウント。

・沈黙(余り) : 秒

→最後の一言の後に残った沈黙の時間をカウント(頷くなどの動作とum...などのフィラーは沈黙とした)。

##### 【会話の種類に関する分析】

子どもたちの会話には、いくつかのパターンがあることが明らかになったので、それを指導法別(クラス別)と回数別に分けて分析した。

#### 4-5 結果

4-4で示した項目ごとに以下に結果を述べていく。

##### 【正確さに関する分析】

ASユニット (All) -【エラーを含むASユニット (Jap▲) +エラーを含むASユニット (Eng▲)】/ASユニット (All)で計算した数値(英語で正確に話した割合を算出)から、「児童の発話における正確さ」と「クラス間(指導法)と会話回

数」を比較する二元配置分散分析を行った。分析の結果、交互作用は認められなかった。また、3クラス間においても有意差は確認されなかった(表2.2)。しかし会話回数においては有意差 ( $p < .05$ ) が確認された(表2.1)。

このことから、3回程度ペアを変えて繰り返し会話を行うことにより英語での会話の正確さの向上と日本語の使用が減少したことが分かる(図1)。

表1. 正確さとクラス間・会話回数の記述統計 平均(標準偏差)

	1回目	2回目	3回目
4-A	0.79(0.192)	0.84(0.146)	0.86(0.217)
4-B	0.71(0.173)	0.70(0.309)	0.89(0.117)
4-C	0.65(0.286)	0.71(0.192)	0.73(0.198)

表2.1 正確さとクラス間・会話回数(被験者内効果の検定)

要因	平方和	自由度	F値	有意確立
Round	0.273	2	4.444	0.015
Round×Class	0.111	4	0.905	0.465

表2.2 正確さとクラス間・会話回数(被験者間効果の検定)

要因	平方和	自由度	F値	有意確立
切片	70.785	1	1006.967	0.000
Class	0.396	2	2.817	0.072
誤差	2.671	38		

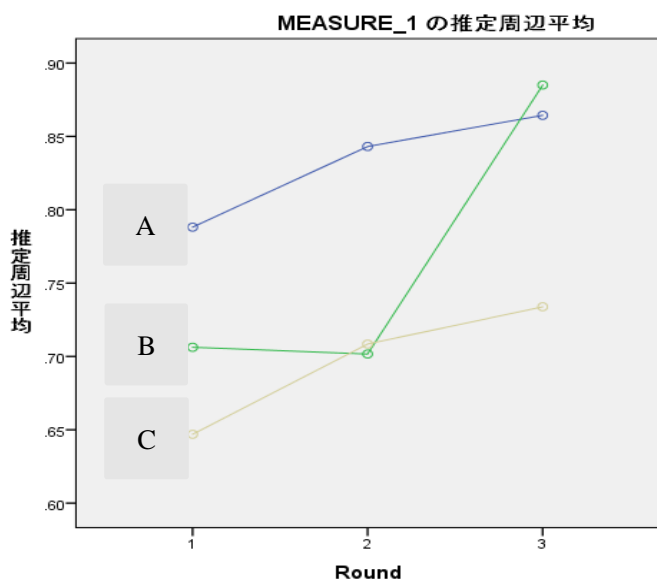


図1. 正確さとクラス間(指導法)・会話回数の比較

#### 【発話量に関する分析】

「児童が英語で正確に発話した量」と「クラス間(指導法)と会話回数」を比較する二元配置分散分析を行った。分析の結果、交互作用は認められなかった。しかし会話回数 ( $p < .05$ ) と3クラス間 ( $p < .001$ ) においては有意差が確認された(表4.1と表4.2)。

表3. 発話量とクラス間・会話回数の記述統計 平均(標準偏差)

	1回目	2回目	3回目
4-A	10.63(3.722)	12.19(3.868)	12.19(5.193)
4-B	7.50(2.812)	8.50(4.482)	11.58(3.942)
4-C	5.69(3.250)	7.31(4.090)	7.69(2.983)

表4.1 発話量とクラス間・会話回数(被験者内効果の検定)

要因	平方和	自由度	F値	有意確立
Round	131.594	2	5.487	0.006
Round×Class	41.054	4	0.856	0.494

表4.2 発話量とクラス間・会話回数(被験者間効果の検定)

要因	平方和	自由度	F値	有意確立
切片	10377.303	1	470.254	0.000
Class	492.267	2	11.154	0.000
誤差	838.562	38		

さらに詳しく見極めるためにボンフェローニ法の多重比較を行った結果、4-Bにおける2回目から3回目にかけて有意差が確認された ( $p < .05$ )。このことから3回程度ペアを変えて繰り返し会話を行うことにより児童の発話量が全体的に増え、特に4-Bの2回目から3回目にかけては多くの変化があったことが分かる。また4-Aは一貫して高い水準を保ち、4-Cは一貫して低い水準を保っていることも分かった(図2)。

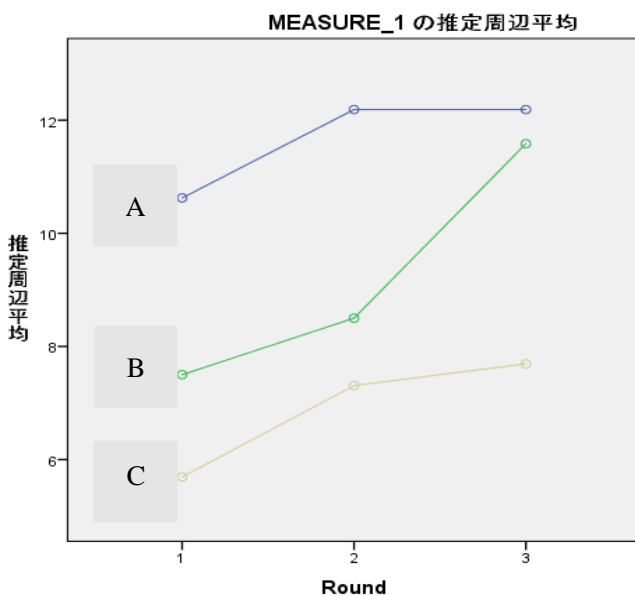


図2. 発話量とクラス間(指導法)・会話回数の多重比較

#### 【沈黙に関する分析】

「沈黙(会話中):秒」と「沈黙(余り):秒」を足した合計から、「児童の発話における沈黙の時間」と「クラス間(指導法)と会話回数」を比較する二元配置分散分析を行った。分析の結果、交互作用は認められなかった。また、会話回数、

3クラス間、共に有意差は確認されなかった(表 6.1 と 6.2)。つまり今回の指導法や会話回数は児童の沈黙に影響を与えなかったということが分かる。

表 5. 沈黙とクラス間・会話回数の記述統計 平均 (標準偏差)

	1回目	2回目	3回目
4-A	13.25(7.066)	12.37(9.179)	14.81(9.318)
4-B	15.25(11.45)	16.92(9.090)	16.42(12.88)
4-C	12.58(13.114)	23.54(14.649)	22.54(10.365)

表 6.1 沈黙とクラス間・会話回数 (被験者内効果の検定)

要因	平方和	自由度	F 値	有意確立
Round	429.548	2	2.591	0.082
Round×Class	577.639	4	1.742	0.149

表 6.2 沈黙とクラス間・会話回数 (被験者間効果の検定)

要因	平方和	自由度	F 値	有意確立
切片	32752.369	1	174.787	0.000
Class	817.034	2	2.180	0.127
誤差	7120.592	38		

#### 【会話の種類についての分析】

以下に示すような会話のパターンが見られたのでそれを指導法別と会話の回数別に表にまとめた。調査は全児童が参加したが、タブレットの不良により 4-B と 4-C では、うまく動画が記録されていないものがあるので、それらは調査対象から除外した。

- ◎：テーマに沿って自由に会話が広げられており、◎動画のパターンに近い会話
- ：What ○○ do you like?のやり取りの後○○の部分を変更しもう一回行っていた会話
- ：◎でも○でもない会話 (Do you like～?や I like～.というやり取りのみを行うパターンが多かった)
- ☆：「ほとんど日本語」か「日本語で教えたり指示したりすることが多い」会話
- △：What food do you like? I like～.のやり取りを2回繰り返す会話 (定型表現を2回)
- ▲：What ○○ do you like?のみの会話 (定型表現を1回)
- ：会話不成立 (途中で終了・返答がない、など)

これをクラスごとに3回の会話を全て合計して集計したところ、◎・○・☆・▲・■で特に大きな差が現れていた(表 7)。このことから、4-A (2つの動画を視聴後よい点に絞った指導)は、型通りの会話をするのではなく、概ね自分の気持ちを入れて自由に英語で話すことができていたのではないかと推測される。

次に全クラスの会話を会話の回数別に集計したところ、回数を重ねることにより、◎・○・■において変化が見られた(表 8)。このことから3回ほど同じテーマで、ペアを変えてやり取りを重ねることにより、ある程度自分の気持ち

を入れて自由に英語で話せるようになってくると同時に、会話が不成立になる確率が低くなると推測される。

表 7. 指導法別 (クラス別) 会話のパターン

	4-A	4-B	4-C
◎	22	8	3
○	8	5	1
●	8	4	3
☆	3	3	6
△	1	4	0
▲	6	9	21
■	0	7	7
合計	48	40	41

表 8. 回数別会話のパターン

	1回目	2回目	3回目
◎	6	13	14
○	3	6	5
●	6	4	5
☆	5	3	4
△	2	1	2
▲	11	12	13
■	9	5	0
合計	42	44	43

#### 4-6 考察・まとめ

正確さにおいては、会話回数で有意差が認められたことから、3回程度同じテーマのもと会話を繰り返すことにより、正確さの度合いが増したと同時に日本語で話す割合が減少したことが分かる。同じテーマで会話を繰り返すことと途中でモデル動画を視聴したことにより、徐々に児童が英語での会話の仕方を掴んできたことからこのような結果になったと考えられる。なお、英語のエラーにもある程度傾向が見えた。まず一番多かったパターンが「平叙文の語尾をあげて発音し疑問文として扱うエラー」である。例えば“Do you like com?”と言いたいところを“I like com?”と言っていたり“You too?”を“Me too?”と言ったりしていた。3クラスで10件以上このエラーがあったが、語尾をあげて話すことによってきちんと相手に意図は伝わっており、どのペアも違和感なく会話を続けていた。次に「動詞のエラー」である。例えば“I like orange.”と言いたいところを“I orange.”と言っていたり、“I like curry and rice.”を“I want curry and rice.”と言ったりしていた。このように動詞が抜けてしまったり、他の動詞と混同したりするパターンがどのクラスでも見られた。最後に「It's～. を使ったエラー」である。What food do you like?の返答に対してI like～.と答えるところをIt's～.と答えてしまっていたり、答える時にいつでも文頭にIt'sをつけたりして答えるパタ



ーンも確認できた。

以上 3 点が全クラスで目立ったエラーだが、共通しているのは、お互いにどのエラーも指摘することなく会話を続けていたことである。逆に What ○○ do you like? が言えないエラーもあったが、このときは、「What food do you like? って言うんだよ」「What food do you like? って聞いて」と指摘することが多かった。

発話量においては会話回数と 4-B の 2 回目から 3 回目にかけて有意差が認められた。まず 4-B の発話量が増えていることから、モデル動画においてよくない点に絞った指導をしても効果はあることになる。ただ、全体を見てみると 3 回程度繰り返し会話をさせることにより、発話量が増えていることも分かる(図 2)。このことから同じテーマのもと、繰り返し会話をさせることで発話量を増やすことができると考えられる。しかし 4-C では一貫して低い水準を保っていることから、単純に繰り返すだけでなく、そこに「教師からの指導を入れること」が児童にとって発話量を増やすポイントだと分かる。なぜなら、4-C の児童が 2 つのモデル動画を視聴後に話し合った内容を調べると、クラスの 3 分の 1 程度はこちらが意図したことに気づいていたが、それが 2 回目以降の Small Talk に生かされていなかったからだ(4-C の児童の話し合いから抜粋:「1 本目の動画は先生が 2 人とも固まっていた!好きな物の中でも『どういうものが好き?』とか聞いた方がいい気がする。辛いとか、甘いとかも言っている。食べ物の中でも種類があるから、それを言えればいいと思う。あとは相手もそれが好きかどうか聞いた方がいい気がする。相槌とかも打った方がいい気がする!」)。このように、いい気づきをしているペアもいたが、話し合ったことに対して教師から具体的な指導がなかったことにより、2 回目以降の Small Talk に影響が出なかったと考えられる。また 4-A においては一貫して高い水準を維持していた。図 2 からも分かるように 1 回目から発話量が多く、うまく自分の思いを入れたやり取りができていたと考えられる。そのことが中間指導を通して自信へと繋がり、引き続き 2 回目以降も 1 回目と同じ感覚で会話を繰り返せた結果だと考えられる(天井効果であったとも考えられる)。

沈黙においては、クラス間(指導法)と会話の回数における有意差はどこにも認められなかった。このことから、今回の実践においては直接的な影響はなかったと言える。

会話の種類分析からは、「視聴した動画のよかった点に絞った指導を行ったほうが、より自由度の高いやり取りを促すことができるのではないかと考えられる。また回数を重ねることで自由度の高いやり取りができるようになるかもしれない」という 2 点が明らかになった。

最後に、モデルを示しての指導法についてだが、筆者の実感としては、4-A のよい点に絞った指導が児童にとっては一番すんなりと受け入れられていたように感じた。それは、普段からどんな授業でも「いい例を示されて、そこから学ぶ」という経験が多いからではないかと考えられる。

以上のことから、児童に英語での自由な発話を促してい

く指導法としては、『児童の実態に適したテーマのもと、まずはやり取りをやらせてみる。そして中間指導として会話のモデル(テーマに沿った上で自分の思いや考えなどが入っている会話)を示しつつ、教師からどこがいいのか具体的に指導を入れていき、2 回目、3 回目とペアを変えて繰り返して児童にやり取りをさせること』だと示唆される。

## 5. 終わりに

今回の調査をしていく中で多くの児童のつぶやきを動画から聞くことができた。そこには「無理だよー」「全然喋れなかったね」と言うネガティブなものや「あれ?もう 1 分たっちゃった?」「楽しかったー!」というポジティブなもの、どちらもあった。英語で自由に話すことは負担の大きい活動ではあるが、何とかして自分の言いたいことを相手に英語で伝えられた時の充実感と達成感をはとても大きなものとなる。それを一人でも多くの児童に味わって欲しいというのが筆者の願いである。本研究で明らかになったことをもとに児童にとって負担を感じさせないように配慮しながら丁寧に指導を行っていきたい。

## 6. 参考・引用文献

- 株式会社イーオン. (2021). 「小学校の英語教育に関する教員意識調査 2021 夏」株式会社 AEON. <https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/2109021000.html> 2021-09-02.
- 小泉利恵・山内逸美. (2003). 「日本人中学生のスピーキング能力の発達-自己紹介のタスクを用いて」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』 17, 33-44
- 瀧口均. (2004). 「日本人 EFL 中学生のスピーキング能力の発達研究-流暢さ・複雑さ・正確さの指標を用いて」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』 18, 1-13
- 瀧沢広人. (2019). 『英語教師のための Teacher's Talk & Small Talk 入門-40 のトピックを収録! つくり方から使い方まで丸ごと分かる!』 明治図書出版
- 筑波大学. (2009). 「第二言語習得に関する用語集」筑波大学. <https://www.u.tsukuba.ac.jp/~ushiro.yuji.gn/Publishing/SLAglossary.htm> 2021-01-22.
- 町田智久. (2021). 「教科書活用の 3 大お悩みポイントとは? -量・内容・活用法への対処法」『英語教育』 (9 月号) 大修館書店
- 文部科学省. (2017). 『小学校学習指導要領 解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂出版
- 文部科学省. (2017). 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
- 山口美穂. (2019). 『身近な話題で楽しく話せる! Small Talk 月別メニュー 88』 明治図書出版
- 山口美穂・巽徹. (2020). 「Small Talk の継続的な実施による児童生徒の発話パフォーマンスの変化」 *JES Journal* 20, 84-99.
- 山田誠志. (2018). 『「考えながら話す」小学校英語授業-使いながら身に付ける英語教育の実現-』 日本標準